

講演

映像媒体の可能性 ダンス表現の新しい地平

日本女子体育大学 松澤 慶信

新しい素材が誕生し、表現媒体としても新しく応用されるようになるとき、その表現媒体の持つ物理的素材の条件が、その表現内容の題材までも決定することはよく知られているとおりです。ウォークマンが登場したことによって、音楽や音楽作品の在り方、そしてその鑑賞の仕方までもが変わってきたことを、われわれはもはや体験済みです。再生される音楽の「質」はスピーカーどころか、常に耳に接触する小さなイヤホンを通じて、しかも野外の雑音に負けることなく鮮明に聞こえることを前提にミキシングされ、録音再生された人工的に手の加わったものです。

ライブと複製芸術という比較は、もはや価値判断の優劣が意味をなさないほどに、私たちは「幻影の時代」を生き、オーセンティックな本物に価値をおかなくてもいいという転倒を経験しています。何をもってオーセンティックである基準を決めたいのでしょうか。コピーでとった雑な画像でも、スキャンしてコンピュータ上で処理すれば、元の原像よりもきれいに再生できるのです。

ビデオの普及は、炬燵でミカンを食べながらパリ・オペラ座によるニジンスカの『結婚』が見られる喜びをもたらしてくれました。しかしこれは、あくまでも媒体の簡便さによる普及のおかげであって、アートであることよりもまず簡便な再生復元ツールとしての恩恵に服している、つまり私たちは芸術論の前に、メディアとしての映像媒体の便利さに満足しているというべきでしょう。

しかし、このツールとしての簡便さは、ダンス作品の中に映像を盛り込んで使う方法を拓きました。舞台美術に容易に映像表現が加わったのです。また、ダンスの動きにカメラ・アングルを意識した動きが振付けられるようになってきました。しかしこれはライブな上演芸術であるというよりも、映像作品の枠組みの中でのダンスについてです。(もちろんこの映像撮りをきっかけに振付家の語法が変わる可能性も否定できません)

映像作品の方にも、積極的にダンスを取り上げるものが増えてきました。しかも極端な例として、そこにダンスが無くても、ダンスな映像作品が、つまり映像の速度や写された対象の動きがダンスチックに編集された映像作品が、ビデオ・ダンス作品として呈示されるのです。

こうして、映像がダンスを対象にした記録媒体

としての役割をもはや超えて、身体あるいはその動きを活かすメディア・アートしてアピールするようになってきた今日、これらの芸術的営為によって、ようやく両者が新しい創造的な関係を築きつつあることに、そろそろ積極的な問題関心を向けてもよいでしょう。上演芸術の持つライブ感覚やリアリティが、映像作品の中のダンスでは欠けるという古典的な考え方にもはやとどまるのではなく、です。

ところで、音の録音機械が登場してきたことで、楽譜は消滅することなくかえって必要性を増したように、録音機械はアナリティックなツールとして、より高次の役割を担って機能するようになりました。では映像媒体ではどうでしょうか。

流布率の低い舞踊譜のおかげで、はるかに便利な記録ツールとして確かにそのままで大いに役立つてはいますが、しかしそれ以上に、いざ動きを追求しようとするとき、かえって例えばラバノテーションを支える動きの「原理」に立ち返らなければならないことを、映像媒体は知らせてくれました。コンピュータ・グラフィックスやロボット工学において、動きの分析を支える原理に立ち返ることが要請されたのです。

新しい媒体の登場は、たしかに従来の媒体を追いやってしまいますが、実は作品の存立原理をあらためて気付かせてくれます。逆にいえば、この新しい媒体がまことの「新しさ」を生み出すためには、実はこの古い媒体とそれによって作られた作品の存立原理を確認することが必要となるのでしょうか。ダンスという古くからある身体の表現手段の中にこそ、映像表現の新しさが隠されているのかもしれない。

ジャンルに固有の形成法則（ジャンルの様式）が他ジャンルに応用されていくにあたっては、本来のジャンルが持つ原理を確認することが必要でしょう。とりわけ表現様式の変革期には。映像作品がダンスな作品であると形容できる作品の存在の仕方を、あるいはダンス作品が映像的なパノラマを開陳するようになってきた今、両者の作品存立の原理をあらためて再確認すべき時でしょう。

しかしダンスと映像は、まだお互いにこの原理を探求しきってはいないようです。ダンスを、素材やモチーフとして使って作ったビデオ・アート作品にせよ、映像を取り込んだダンス作品にせよ、そして両者の作品がその在り方を相手のジャンルに固有の形成法則をまねて呈示するようになってきているにせよ、しかしその可能性はまだまだ拓がっていくべきでしょう。

作品存立の原理の探求、そしてビデオだけにとどまることのない映像媒体の可能性、そしてダンス表現の新しい地平の獲得、これらを見届けていきたいですし、そのプロセスに立ち会える現場と幸福に、今、われわれはいると思います。